



仁川市民の仁川話VOL.01

仁川レトロ…開港町の昔と今

▲仁川開港博物館内部(旧日本第一銀行朝鮮支店)

大韓民国の首都・ソウルと一番近い広域市である仁川広域市。1989年から北九州市と姉妹都市締結を結んでいて、文化・スポーツ・青少年交流など様々な分野で交流を行ってきました。仁川には世界に誇るハブ空港・仁川国際空港が位置していて、旅客はもちろん物流の拠点になっています。また、仁川には空港だけではなく韓国3大貿易港の一つである仁川港もあります。国際空港、国際貿易港を持つ仁川は**韓国の玄関口**としての役割を果たしています。



▲仁川開港博物館(旧日本第一銀行朝鮮支店)
(写真: 韓国観光公社)



▲沓洞聖堂(写真: 韓国観光公社)
1890年に聖堂建築定礎式が行われ1897年に完工された。
1933年に外観を蓮歌で積み上げて1937年に今の姿になった。

歴史の痕跡が残っている開港町

実は、仁川は100年も前から玄関口として賑わった**開港町**です。1876年、江華島条約(日朝修好条規)によって朝鮮半島の三つの港を開港することになった際に、仁川の開港が決まりました。1883年の開港と同時に仁川の風景は急激に変わります。日本をはじめ、清・アメリカ・イギリス・フランスなど各国から人々が流れ込んできました。港の近くには中国租界・日本租界・各国租界が設定され、銀行や郵便局、領事館などルネサンス風の近代建築物が続々と建てられました。外国人居住者のためにウクライナ出身の設計者が作った韓国初西欧式公園「自由公園(1888)」、首都・漢陽(現ソウル)に向かうために仁川港に降りた外国人が利用した「大仏ホテル(1888)」、フランス人神父が沓洞の丘の上に建てた「沓洞聖堂(1890)」、日本人貿易業者のために作られた「旧仁川日本一八銀行支店(1890)」と「旧仁川日本第五十八銀行支店(1892)」、各国の外交官が集まった社交クラブ「済物浦倶楽部(1901)」など、様々な施設や設備、建物ができます。朝鮮半島で一番異国情緒があふれる、多くの人が往来する場所、それは仁川でした。

仁川を代表する観光地・ロケ地

近代文化財が数多く残る港近くのエリアは行政により「仁川開港場文化地区」と指定され、今は仁川を代表する観光地の一つです。日本家屋をリノベーションした雑貨店、カフェ、レストランなどがある「開港場通り」、韓国風ジャージャー麺の発祥地であり、有名な中華料理屋が数多く並んでいる「チャイナタウン」は多くの観光客が訪れる仁川の名所です。また、開港場一帯はその特有の雰囲気が高く評価され、映画やドラマのロケ地でも有名です。ドラマ「太陽の末裔 Love Under The Sun」、「トッケビ〜君がくれた愛しい日々」など有名な作品にも登場しました。最近日本Netflix視聴ランキングBEST10に名を挙げたドラマ「サイコだけど大丈夫」の中でも開港場通りを見ることができます。

レトロを越えてNewtro聖地へ

NewtroとはNewとRetroの合成語で、古いもの(Retro)を新感覚(New)で解釈した今流行りの新トレンドです。最近、仁川開港場文化地区から少し離れた「開港路」がNewtro聖地として魅力を発信しています。開港以来、最大の繁華街であり都市の中心だったこのエリアは時代の流れとともに衰退してスラム化してしまいました。仁川の歴史が刻んでいる古い建物は放置され、その価値も色あせていく一方でした。寂しかった開港路で民間による街の再生プロジェクトが始まったのは2018年。歴史ある建物とストーリーをそのまま失ってはいけないという彼らの気持ちは開港路を新たな仁川の名所に変身させました。廃業して何十年も経った病院はカフェに、元花屋はレストランになりました。100年前の塩倉庫は立派なギャラリーに変わりました。今は展示会と手作り工房が開催され、多くの人が思い出を作っています。シャッター街だった開港路は、開港町らしき賑わいの再現に向けて進化しています。

100年前の仁川は新しいもので溢れました。これからの仁川はその時代の情緒とともにさらに新しくなるに違いありません。開港町「仁川」は昔も今も魅力があふれる、多くの人が往来する都市なのです。



作成者 北九州市韓国国際交流員 姜 志守 (カン ジス)

春は小倉城の桜と河内藤園、夏は若松のアジサイと関門花火大会、秋は河内貯水池ともみじ谷の紅葉、冬はイルミネーションを楽しみながら北九州で生活中◎



◀ 日本人家屋をリノベーションした開港場通りのカフェ「パダル」

▼チャイナタウン



▲元病院だったカフェ「ブラウン・ハンス」
(写真: 仁川観光公社ブログ)



▲100年前の塩倉庫を活用したギャラリー「イッタ・スペース」
(写真: 仁川観光公社ブログ)